

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H01933

研究課題名(和文) 日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓

研究課題名(英文) Development of a corpus of Japanese dialects and research on dialects using the corpus

研究代表者

木部 暢子(Kibe, Nobuko)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・名誉教授

研究者番号：30192016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では以下の2点を実施した。

- (1) 日本各地の方言の談話音声データを整備し、諸方言を横断的に検索することが可能な「日本語諸方言コーパス(COJADS)」を作成・公開した。COJADSは、文化庁が1977年から1985年にかけて行った「各地方言収集緊急調査」の談話データをソースとし、国語研が開発した検索アプリケーション「中納言」で検索するように設計されている。
- (2) (1)で構築したCOJADSを使って、「日本語諸方言における主語、目的語の標示形式の地域差に関する研究」や「丁寧形式「デス」の用法の地域差に関する研究」等を行い、データに基づく方言研究の例を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年さまざまな言語のデータベース化が進み、データに基づく言語研究がさかんになったことにより、言語研究に新たな展開が生じている。しかし、日本の方言に関しては、大規模なデータベースやコーパスがこれまで構築されてこなかった。そのような中、本研究では80時間に及ぶ各地方言の談話データを搭載した「日本語諸方言コーパス(COJADS)」を構築・公開し、方言や地域の文化・民俗等の研究基盤を整備して学術研究に貢献した。また、消滅の危機にある各地方言の談話データを大量に搭載したCOJADSは、地域の言語や文化の記録・保存として高い価値をもつと同時に、方言を地域の振興につなげるという社会的意義をもっている。

研究成果の概要(英文)：The following two points were implemented in this study.

- (1) Discourse audio data of dialects from various regions of Japan were compiled. Based on this data, the Corpus of Japanese Dialects (COJADS) was created and released to the public, enabling cross-dialectal searches of various dialects. COJADS is based on the discourse data from the "Emergency Survey of Local Dialects" conducted by the Agency for Cultural Affairs from 1977 to 1985. It is designed to be searched with "Chunagon," a search application developed by the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL).
- (2) Using COJADS, "Study of Regional Differences in Subject and Object Marking Forms in Various Japanese Dialects" and "Study of Regional Differences in the Usage of the Polite Form 'desu'" were conducted, providing examples of data-based dialect research.

研究分野：言語学

キーワード：COJADS 方言の横断検索 検索アプリケーション中納言 格表現の地域差 主語、目的語の標示形式 丁寧表現形式デス 消滅危機言語

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、さまざまな言語のデータベース化が進み、これらのデータベースやコーパスを使った研究がさかんに行われるようになった。これに伴い、言語研究に新たな展開が生じている。日本語に関しても、大量の日本語データベースの構築・公開が行われ、それに基づく分析が行われている。例えば、国立国語研究所の『日本語話し言葉コーパス』(660 時間)、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(1 億語)、『日本語歴史コーパス』(上代～明治・大正)は膨大な量の言語データを搭載したコーパスで、これらのコーパスを使った研究が年々増加している。ただし、これらはいずれも中央日本語のデータであり、日本各地の方言の大規模なコーパスはまだ存在しない。

(2) その一方で、現在、各地の方言が急速に衰退し、消滅の危機にある。日本は方言のバリエーションが豊富であり、明治以降、方言の調査・研究がさかんに行われてきた。日本各地の方言は、長い歴史の中で生じたものであって、各地の方言には地域の文化や民俗、社会習慣等が凝縮されている。しかるに、これらは十分に記録されないまま、標準語化の波を受けて消滅しようとしている。

(3) 以上の状況を踏まえると、各地方言の音声資料をデジタルデータ化して保存するとともに、諸分野の研究に活用しやすいよう検索機能付きのコーパスとして公開することが言語や民俗、社会等の研究だけでなく地域社会の振興にとって急務である。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では以下の3点を目的として研究を推進する。

(1) 日本各地の方言の談話音声データを整備し、諸方言を横断的に検索することが可能な「日本語諸方言コーパス」を構築・公開する。これにより、方言研究や地域の文化・民俗・社会等の研究、及び地域社会の振興に必要な基盤を整備する。

(2) 構築した「日本語諸方言コーパス」を使って方言の分析を行い、データに基づく新しい方言研究の方法を提示する。

(3) 「日本語諸方言コーパス」の構築を通じて、急速に衰退が進む日本各地の消滅危機言語・方言を記録・保存し、地域文化の振興に貢献する。

3. 研究の方法

(1) まず、研究の基盤となる「日本語諸方言コーパス (COJADS)」を構築する。コーパスの元となる各地の方言データには、国立国語研究所が所蔵する「各地方言収集緊急調査」のデータを使用する。このデータの概要は、以下の通りである。①収録時期：1977 年～1985 年。②調査の実施母体：文化庁。各地の調査、及び音声の収録は都道府県の教育委員会による。③調査地点：全都道府県にわたる約 220 地点 (1 県平均 5 地点)。④データ内容：方言による自然談話、場面設定会話、民話の語り等を収録した音声データ (約 2,500 時間のカセットテープ)、及びその一部を書き起こした手書きテキストデータ。

このデータのうち、各都道府県 1 地点 (沖縄県のみ 2 地点)、各地点 20～30 分程度の自然談話を収録したデータ集『方言音声談話資料 日本のふるさとことば集成』全 10 巻 (佐藤亮一・井上文子編、2001～2008) が国書刊行会から刊行されている。本研究では、まず、このデータ集を利用して COJADS (モニター版) を作成し、次にそれ以外の未公開のデータを整備し、逐次モニター版に追加していく。

(2) 検索は、国立国語研究所が開発した検索アプリケーション「中納言」で行う。検索方法としては、パラレルコーパスの方式による標準語検索、及び方言形による検索の 2 種類を設定する。標準語検索では、国立国語研究所が開発した形態素解析辞書 UniDic を利用することにより様々な検索が可能である。また、各地方言を横断的に検索することができるという利点がある。ただし、方言と標準語の間に意味のずれがあるため、標準語の検索キーにより検出された方言形の扱いについては、当該方言内での確認作業が必要である。方言形検索は、文字列検索のみ可能である。各地方言の形態素解析辞書がまだ作成されていないため、方言の形態素検索は現在のところできない。今後、各地方言の形態素解析辞書の作成が課題である。

(3) 構築した COJADS (モニター版) を使って各地方言を分析し、データに基づく新しい方言研

究の手法を提示する。

4. 研究成果

(1) 2019年5月に全国48地点(各都道府県1箇所、沖縄のみ2箇所)、約24時間分の自然談話データを搭載した「日本語諸方言コーパス(COJADS)」モニター版を構築・公開した。その後、順次データを拡張し、2022年3月に約80時間のデータを搭載した正式版COJADSとして公開した。また、検索機能を高めるため、頻度の高い表現や方言特有の現象、例えば、助詞の省略、人称代名詞、フィラー、方言オノマトペ、固有名詞等にタグ付けをし、タグ検索の機能を付加した。(2) 次に、COJADSを使った各地方言の分析例を2つあげる。最初の例として、「日本語の格標示形式に関する地域差」について、COJADSを使って分析した結果を以下に概観する。

日本語は、主語や目的語をあらわすときに助詞「が」や「を」を名詞に接続させて標示する膠着言語である(例:太郎が本を読んだ)。しかし、話しことばでは、主語や目的語が無助詞となる現象がしばしば見られる(例:太郎本読んだ)。これらの文が助詞を任意的に省略したものではなく、特定の意味をあらわす文であること、また、無助詞形の出現には地域差があること等が従来から指摘されてきた(皆島1993、佐々木1998、松田2000、日高2004、小西2016、下地2019、竹内・松丸2019、坂井2019等)。本研究では、無助詞の現象の地域差と無助詞の機能を客観的データに基づいて解明するために、COJADSを使って分析を行った。

分析方法は、以下のとおりである。

- ① COJADSの標準語検索で助詞「が」「を」をキーとして検索を行い、標準語「が」「を」に対応する各地方言の形式を抽出する。
- ② 抽出した例文に構文情報(主文か補分か、目的語と動詞と隣接性等の情報)や主語・目的語の名詞句の意味階層情報(人間名詞・有生名詞・無生名詞等の情報)を付与する。
- ③ これらの情報を使って各地方言の主語、目的語の標示形式を分析する。なお、COJADSでは構築の段階で、標準語に対応する方言形が存在しない場合、そこに「省略タグ」を付与している。これを利用して、地域ごとに助詞形と無助詞形を分類することが可能である。

以上の方法による分析結果は、以下のとおりである。

- (a) 主語、目的語を助詞であらわすか、無助詞であらわすかには地域差がある。主語、目的語が無助詞となる比率が高いのは東北、北陸、関西、逆にその比率が低い(助詞であらわす比率が高い)のは中部、山陽、高知、鹿児島、南琉球である。北琉球では目的語のみ無助詞であらわされ、主語は助詞であらわされる(図1)。
- (b) どの地域でも、主語よりも目的語の方が無助詞となる比率が高い。言い換えると、目的語よりも主語の方が助詞でマークされることが多い。
- (c) 目的語が動詞に隣接している場合は無助詞の比率が高くなり、隣接していない場合に助詞が出現する比率が高くなる。
- (d) 目的語が有生性、特定性等の性質をもつ場合は、目的語が助詞で標示されることが多い。これらに多少、説明を加える。(a)については、このような地域差がなぜ存在するのか問題となる。一つの考え方として、古代語では主語や目的語を無助詞であらわす傾向があるため、無助詞の地域は日本語の古い姿を伝えているという可能性が考えられる。(b)については、日本語(諸方言を含む)の基本語順が「主語-目的語-動詞」であることが関係すると考えられる。すなわち、最初に出現する名詞句を主語として認定し、これに「が」等の主語の標識を付与する。そうすれば、次に出現する名詞句は主語以外、すなわち目的語であると一義的に決まるので、助詞を付与しなくても問題ない(例:太郎が机壊した)。なお、主語、目的語以外の名詞句は「に」「で」などの助詞で標示され、これらが無助詞形になることはない(例:*太郎が机を庭壊した)。(c)についても基本語順が関係すると考えられる。すなわち、目的語は動詞の直前が定位置なので、目的語の直後に動詞が続く場合は、わざわざ助詞を付けて目的語であることを標示する必要がない。しかし、倒置や副詞の挿入等により目的語の直後に動詞が続かない場合(例:太郎が机を金槌で壊した)は、意味の理解に支障が生じないよう、目的語を助詞で標示することになる。(d)については、日本語では一般的に、人間名詞・有生名詞が主語となり、無生名詞が目的語となることが多い。したがって、無生名詞は目的語と解釈され、これは無助詞であらわされる。しかし、目的語が有生名詞の場合(例:太郎が次郎をたたいた)、主語(動作主)と区別するため

に目的語に助詞が必要となる。また、目的語が特定性の名詞のとき(例:太郎がこの机を壊した)には、その名詞句に焦点をあてるために助詞が付加されると考えられ、このような助詞は、格標示と同時に焦点機能をもつと考えられる。



図1 主語、目的語を無助詞形であらわす比率 (COJADS より)

参考文献

木部暢子・竹内史郎・下地理則【編】(2022)『日本語の格表現』くろしお出版/小西いずみ(2016)『富山県方言の文法』東京:ひつじ書房/坂井美日(2019b)「熊本方言の格配列と自動詞分裂」『日本語の格標示と分裂自動詞性』くろしお出版, pp.37-66/佐々木冠(1998)「北海道方言の対格—有生対格と無生対格の統語論—」『日本語科学』4, pp.99-120/竹内史郎・下地理則【編】(2019)『日本語の格標示と分裂自動詞性』くろしお出版/玉懸元(2002)「仙台市方言における格助詞相当『ドゴ』の用法」『国語学会2002年度秋季大会予稿集』pp.127-132/日高水穂(2004)「格助詞相当形式コト・トコ類の文法化の地域差」『社会言語科学』7(1): 51-62/松田謙次郎(2000)「東京方言格助詞『を』の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』51-1, pp.61-76/皆島博(1993)「日本語の格助詞「を」の省略について—有生性と特定性の関与の可能性」『言語学論叢 松本克己克己教授退官記念論文集』, pp.58-70.

(3) 2つめの例として、「丁寧表現『デス』の用法の地域差」について、COJADS を使って分析した結果を以下に概観する。

現代標準語の丁寧表現は、名詞述語では「です」、動詞述語では「ます」、形容詞述語では「ございます」「です」によって行われる。それに対し諸方言では、デスが動詞述語にも使われる(例:スルデス(します)、シタデス(しました))。また、シマスデス、シマシタデスのようにマスやマシタにさらにデスが接続することもある。これらの用法の地理的広がりやこのような表現が生じた要因を客観的データに基づいて考察するために、COJADS を使って分析を行った。分析方法は、(2)に準じる。

分析結果は、以下のとおりである。

- (a) 動詞の丁寧形にデスを使うのは西日本に多い。
- (b) 西日本の中でも「動詞+デス」の使い方に地域差がある。すなわち、九州では動詞の諸活用形にデスが続くことが多く、マスの代わりにデスが使用される。一方、関西ではマス、デシタ等の丁寧形式の後にさらにデスが加えられることが多く、丁寧形式を二重に表現する形でデスが使用される。

(a)については、「動詞、形容詞+デス」の使用の地域差を見るために、次の17項目の表現にしぼって、COJADSの検索例を整理した。

- ①動詞終止(行くデス)、②動詞否定(行かないデス)、③動詞過去(行ったデス)、④動詞否定過去(行かなかったデス)、⑤形容詞終止(良いデス)、⑥形容詞否定(良くないデス)、⑦形容詞過去(良かったデス)、⑧ます終止(ますデス)、⑨ます否定(ませんデス)、⑩ま

す過去（ましたデス）、⑪ます準体（ますんデス）、⑫コンピュータ終止（だデス）、⑬コンピュータ過去（だったデス）、⑭コンピュータです終止（ですデス）、⑮コンピュータです過去（でしたデス）、⑯存在動詞終止（ございますデス）、⑰存在動詞過去（ございましたデス）

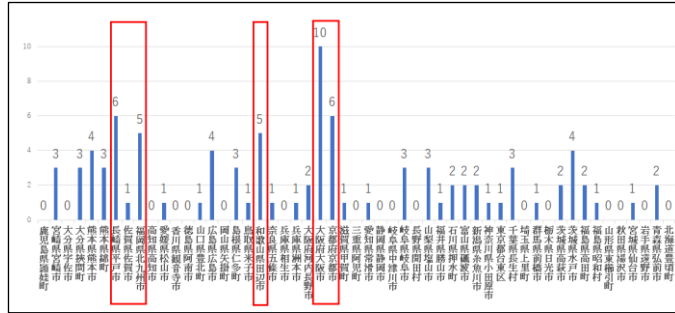


図2 「デス」が使用される項目数（COJADSより）

17項目のうちいくつかの項目で

「デス」が使用されるかを示したのが図2である。関西と九州で使用項目が多いという結果が得られた。

(a)においてデスの使用が多くなっている関西と九州の使用項目を吟味した。その結果、九州では動詞の諸活用形にデスが使用され、デスがマスの代わりに動詞の丁寧表現を担っていること、関西ではマスの諸活用形、及びデシタの後にさらにデスが加えられ、マスとデスの両方により二重の丁寧表現が作られていることが明らかとなった（表）。

表 関西の「デス」の使用と九州の「デス」の使用（COJADSより）

◆九州のデスの特徴

地域	動詞終止	動詞否定	動詞過去	動詞否定過去	動詞推量
福岡県北九州市	2	1	4		
長崎県平戸市	25	8	12	2	2
熊本県	4	2	29		
和歌山県田辺市		1	10		

(北九州市、男73歳) ニジカンクライ **カカルデス**バイナー (二時間くらいかかりますよ)
 (長崎県平戸市・男77歳) ソリヤ **キカンデス** (ッテカデ (聞かないですけれどね))
 (長崎県平戸市・男77歳) **イーヨッタデス**タイ (言っていましたよ)
 (平戸市、女69歳) **オリヤジャッタデス**ネ (いなかったですな)
 (平戸市・男77歳) ナツル**ゴタルデス**ネ (なっているようですな)

◆京都・大阪のデスの特徴

地域	マス	マセン	マシタ	マスン	ダッタ	デシタ	ゴザイマス	ゴワシタ
京都府京都市			3	1	1	1		
大阪府大阪市	2	1	8			1	1	1
和歌山県田辺市					2			

(大阪市、男63歳) オカガミ シ**デマスデス**ワ (鏡餅[を]していますよ)
 (大阪市、女72歳) アンマリ シ**リマセンデス** (あまり知らないです)
 (大阪市、男77歳) ミ**デマシタデス**ケドネー (見ていましたですけれどね)
 (大阪市、女72歳) ソー**デシタデシタ** (そうでしたですな)
 (大阪市、女72歳) ジュンジョガ **ゴザイマシタデシタ** (順序がございますのですな)
 (大阪市、女72歳) **ゴワシタデッカ** (ございましたですか)
 (田辺市、女61歳) モ カネ**ダッタデスカ** (もう鐘でしたか)

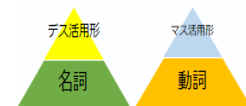
標準語、関西方言、九州方言のデスの使用をまとめると以下のようなになる。

● 標準語（デス・マス相補タイプ）

名詞の丁寧はデス、動詞の丁寧はマスにより作られ、デスとマスが相補的に分布する。

名詞の丁寧形：名詞＋**デス**（終止・過去・否定・推量）

動詞の丁寧形：動詞＋**マス**（終止・過去・否定）



● 関西方言（マス＋デスの二重丁寧タイプ）

名詞の丁寧形式デシタ、動詞の丁寧形式マスの後にデスが付き、マスとデスによる二重の丁寧表現が作られる。

名詞の丁寧形：名詞＋**デス**／**デス**（過去）＋**デス**

動詞の丁寧形：動詞＋**マス**（終止・過去・否定）＋**デス**



● 九州方言（デス一本化タイプ）

名詞の丁寧表現、動詞の丁寧表現がデスで一本化されている。

名詞の丁寧形：名詞＋**デス**（終止・過去・否定）

動詞の丁寧形：動詞（終止・過去・否定）＋**デス**



参考文献

川口良 (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』くろしお出版／木部暢子 (2022) 「丁寧表現形式「デス」の地域差 日本語諸方言コーパス (COJADS) から」窪菌晴夫, 朝日祥之 [編] 『言語コミュニケーションの多様性』 pp. 15-35, くろしお出版／九州方言学会 [編] (1969) 『九州方言の基礎的研究』風間書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 218
2. 論文標題 ことばから見た日本列島人の起源	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴博	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木部暢子	4. 巻 119-12
2. 論文標題 消えゆく言語・方言を守るには	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 木部暢子	4. 巻 96-1
2. 論文標題 疑問文の文末音調による系統内類型論の試み - イントネーション研究のために -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本語方言の多様性 - アクセントの地域差 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/92928	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本の危機言語・方言 - 奄美・沖縄の親族名称・親族呼称 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92929	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 奄美・沖縄の言語研究から - 奄美方言のエピデンシャリティ -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92931	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 対格標示形式の地域差 - 無助詞形をめぐって -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 20-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92930	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 日高水穂	4. 巻 68-3
2. 論文標題 対照方言学の方法論と展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学文学論集	6. 最初と最後の頁 139-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 日高水穂	4. 巻 119-11
2. 論文標題 昔話の談話構造と表現形式にみる地域性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 217-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 日高水穂	4. 巻 102
2. 論文標題 談話展開からみた < 創生期 > の東西漫才	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学 国文学	6. 最初と最後の頁 399-424
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 日高水穂	4. 巻 103
2. 論文標題 役割関係からみた < 完成期 > の東西漫才	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西大学 国文学	6. 最初と最後の頁 414-438
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 椎名渉子	4. 巻 1
2. 論文標題 評価に関わる言語行動の表現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化庁委託事業報告 『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開2』	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池谷知子・黒木邦彦・田附敏尚	4. 巻 22
2. 論文標題 日本語学習者のための「日本語音便データベース」の作成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002083	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 35
2. 論文標題 富山の方言 - 砺波市方言の引用標識をめぐって -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 砺波散村地域研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷康雄	4. 巻 3
2. 論文標題 『日本言語地図』と『日本言語地図』データベース：データベース化(LAJDB)による多角的分析に向けて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 29-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三井はるみ, 鎌水兼貴	4. 巻 3
2. 論文標題 首都圏若年層の言語に地域差をもたらすもの	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 103-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 2
2. 論文標題 記述方言学の研究動向	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 63-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 36-1
2. 論文標題 地域語に見る大和言葉	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 34
2. 論文標題 隠岐の島の方言	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 隠岐の文化財	6. 最初と最後の頁 24-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐陽介	4. 巻 150
2. 論文標題 南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 33-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計48件（うち招待講演 12件 / うち国際学会 16件）

1. 発表者名 中澤光平 , 大槻知世 , 上村健太郎 , CARLINO Salvatore , 佐藤久美子 , 木部暢子
2. 発表標題 日本語諸方言における助詞との縮約形の地域差 : COJADSに基づく分析から
3. 学会等名 日本方言研究会第108回研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大槻知世, 上村健太郎, カルリノ・サルバトーレ, 佐藤久美子, 中澤光平, 木部暢子
2. 発表標題 コーパスを使った方言研究の開拓 - 『日本語諸方言コーパス (COJADS) モニター版』を使って -
3. 学会等名 日本語学会2019 年度春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nobuko Kibe
2. 発表標題 Reporting on endangered languages and dialects in Japan: Their recording, conservation, and transmission
3. 学会等名 21st Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 COJADS に見るモダリティ形式のバリエーション
3. 学会等名 方言コーパス研究発表会2019 「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高水穂
2. 発表標題 方言談話の叙述の文末表現
3. 学会等名 方言コーパス研究発表会2019 「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nobuko Kibe, Hidenori Kiku, and Rintaro Kiku
2. 発表標題 A Report on Language Revitalization on Yoron Island
3. 学会等名 The International Year of Indigenous Languages 2019: Perspectives Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hanae Koiso, Masayuki Asahara, Salvatore Carlino, Ken'ya Nishikawa, Kazuki Aoyama, Yuichi Ishimoto, Aya Wakasa, Michiko Watanabe, Yoshimi Yoshikawa, Nobuko Kibe, Kikuo Maekawa
2. 発表標題 Demonstration of Corpus Concordance Systems: Chunagon and Kotonoha
3. 学会等名 The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Salvatore Carlino, Yoshimi Yoshikawa, Kazuki Aoyama, Nobuko Kibe
2. 発表標題 Corpus of Japanese Dialects (COJADS)
3. 学会等名 The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nobuko Kibe
2. 発表標題 Corpus based study of Japanese dialects; Regional differences in case marking system
3. 学会等名 新学術領域・ヤポネシアゲノム・言語班2019年度研究集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yosuke Igarashi
2. 発表標題 Comments to papers in the panel: "Dialectal differences in the rules that determine the accent of Japanese compound nouns: Issues concerning the reconstruction of a proto-system common to all dialects"
3. 学会等名 The 3rd EAJS Conference in Japan (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yosuke Igarashi
2. 発表標題 Dialect-specific prosodic phrasing in Japanese: With a focus on dialects without lexical tone contrasts
3. 学会等名 The 6th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kenan CELIK, Nobuko KIBE
2. 発表標題 Raising language diversity awareness in Japan through web-based open access application
3. 学会等名 The 6th International Conference on Language Documentation & Conservation (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nobuko Kibe
2. 発表標題 Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects
3. 学会等名 The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語と琉球語の成立をさぐる - アクセントの比較対照から -
3. 学会等名 第72回日本人類学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobuko Kibe
2. 発表標題 Accent systems in Japanese dialects
3. 学会等名 NINJAL International symposium, Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 危機言語の記録・保存・復興
3. 学会等名 沖縄言語研究センター40周年記念シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobuko Kibe, Tomoyo Otsuki and Kumiko Sato
2. 発表標題 Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects: From the “Corpus of Japanese Dialects”
3. 学会等名 Special Session, LREC-2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 疑問文のイントネーション
3. 学会等名 方言コバース研究発表会「日本語諸方言コーパスデータを使った方言の分析」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション
3. 学会等名 コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション モダリティ - 」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takayuki KAGOMIYA, Yuto NIINAGA and Nobuko KIBE
2. 発表標題 Developing a Block Puzzle Game for Studying Ryukyuan Language Phonetic System
3. 学会等名 Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2018)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション
3. 学会等名 NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 これからの方言アクセント研究がなすべきこと
3. 学会等名 日本語学会2018度春季大会シンポジウム「日本語記述研究の未来 - 今なすべきこと - 」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 Towards an adequate description of the tonal systems of Southern Ryukyuan
3. 学会等名 NINJAL International symposium, Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 3拍名詞第4類における本土日本語と琉球語間の1対2のアクセント型の対応について
3. 学会等名 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 琉球語のアクセント (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか？：共通改新としての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築
3. 学会等名 平成30年度琉球大学学長PIプロジェクト「琉球諸語における『動的』言語系統樹システムの構築をめざして」 鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み
3. 学会等名 シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 日本語のイントネーションと言語類型論
3. 学会等名 Prosody & Grammar Festa 3 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuo Kumagai
2. 発表標題 A quantitative observation of dialect diffusion based on population distributions and road networks
3. 学会等名 9th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 椎名 渉子
2. 発表標題 非難の言語行動の地域差 東北と近畿に注目して
3. 学会等名 東北大学文学部/大学院文学研究科言語学シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田附敏尚
2. 発表標題 諸方言コーパスを使った方言の分析(1)
3. 学会等名 方言コ ーパス研究発表会「日本語諸方言コーパスデータを使った方言の分析」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池谷知子, 黒木邦彦, 田附敏尚
2. 発表標題 日本語学習者のための「日本語連声データベース」の作成
3. 学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部 暢子
2. 発表標題 「日本語諸方言コーパスに見る富山方言」
3. 学会等名 富山大学人文学部 第6回言語学・日本語学公開講演会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 ことばが接するところ - 富山の方言 -
3. 学会等名 砺波散村地域研究所例会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 言語調査における連携・協力～八丈島・岡崎市・鶴岡市などの調査から
3. 学会等名 第32回人文機構シンポジウム / 情報・システム研究機構シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobuko Kibe, Kumiko Sato, Taro Nakanishi and Kohei Nakazawa
2. 発表標題 Copula based study of Japanese dialects: Regional differences in case marking system
3. 学会等名 Methods in Dialectology XVI (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yasuo Kumagai
2. 発表標題 A quantitative observation of the relation among population distributions, road networks, and dialect similarities
3. 学会等名 Methods in Dialectology XVI (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 MITSUI Harumi, YARIMIZU Kanetaka, SAWAKI Motoei
2. 発表標題 The structure of diversified language usage in metropolitan Tokyo
3. 学会等名 Methods in Dialectology XVI (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kibe, Nobuko and Oshima, Hajime
2. 発表標題 Plural Forms in Yoron-Ryukyuan
3. 学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 五十嵐陽介, 広瀬友紀
2. 発表標題 統語的曖昧性を解消する韻律的手段: 東京方言と近畿方言
3. 学会等名 第31回日本音声学会全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子・大槻知世・佐藤久美子
2. 発表標題 諸方言の文末イントネーション - 日本語諸方言コーパスから -
3. 学会等名 音声資源活用シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子, 佐藤久美子, 大槻知世
2. 発表標題 諸方言コーパスに見る男性の言葉・女性の言葉
3. 学会等名 コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション 話者の属性」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 方言コーパスに見る日本語諸方言の助詞
3. 学会等名 平成28年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション 助詞のすがた」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子, 佐藤久美子, 中西太郎, 中澤光平
2. 発表標題 「日本語諸方言コーパス」の構築について
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2016
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 諸方言の「やる・くれる・もらう」- テキストを使った方言研究 -
3. 学会等名 九州方言研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 諸方言コーパスに見る格と取り立て - 九州方言を中心に -
3. 学会等名 共同研究プロジェクト研究発表会「格と取り立て」
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 対格表現の地域差 - 助詞ゼロをめぐる -
3. 学会等名 東京外国語大学語学定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 五十嵐陽介, 平子達也
2. 発表標題 「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本土方言 佐賀県杵島方言と琉球語の比較
3. 学会等名 日本音声学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Igarashi, Yosuke
2. 発表標題 An urgent task for research on the tone systems of Japanese and Ryukyuan: What should fieldworkers do in the next decade?
3. 学会等名 Phonology Forum 2016
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計15件

1. 著者名 木部暢子, 青井隼人, 阿部貴人, 有田節子 他35名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 192
3. 書名 明解方言学辞典	

1. 著者名 青井隼人, 木部暢子, 児倉徳和, 友定賢治, 中山俊秀, 平子達也, 塩原朝子, 品川大輔, 山越康裕	4. 発行年 2020年
2. 出版社 アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 233
3. 書名 フィールドワーク事前研修報告書	

1. 著者名 青井隼人, 木部暢子, 大槻知世, ローレンス・ウェイン, 中川奈津子, 三宅俊浩, 川瀬卓, 小池純一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所	5. 総ページ数 65
3. 書名 青森県むつ方言調査報告書	

1. 著者名 青井隼人, 木部暢子, 平子達也, 久保園愛, 山口響史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所	5. 総ページ数 193
3. 書名 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 木曾川方言調査報告書	

1. 著者名 麻生玲子, 山本友美, 木部暢子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所	5. 総ページ数 115
3. 書名 椎葉村方言語彙集中間報告書 上椎葉・尾八重・鹿野遊・大河内編	

1. 著者名 木部暢子, 山本友美, 麻生玲子, 新永悠人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所	5. 総ページ数 96
3. 書名 椎葉村方言語彙集中間報告書 仲塔・松尾編	

1. 著者名 小林隆, 志村隆文, 新井小枝子, 小川俊輔, 櫛引祐希子, 椎名涉子, 八木澤亮, 作田将三郎, 大西拓一郎, 半沢康, 佐藤高司, 大野真男, 竹田晃子, 小島聡子, 坂喜美佳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 198
3. 書名 シリーズ 日本語の語彙 8 方言語の語彙 日本語を彩る地域語の世界	

1. 著者名 仁田義雄, 小林英樹, 佐野由紀子, 張麟声, 鄭相哲, 塩入すみ, 野田春美, 三宅知宏, 森山卓郎, 高梨信乃, 日高水穂, 前田直子, 高橋美奈子, 阿部忍, 安達太郎, 山田敏弘, 庵功雄	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 275
3. 書名 語彙論的統語論の新展開	

1. 著者名 木部暢子, 松倉昂平, 三樹陽介, 平子達也, 山本和博, 吉井重伸, 坂本忠司, 友定賢治	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所	5. 総ページ数 154
3. 書名 日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 島根県隠岐の島方言調査報告書	

1. 著者名 原田走一郎, 新田哲夫, 中澤光平, 松倉昂平	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所	5. 総ページ数 85
3. 書名 日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 石川県白峰方言調査報告書	

1. 著者名 木部暢子, 竹内史郎, 下地理則, 小田勝, 後藤睦, 松丸真大, 小西いずみ, 坂井美日, 金田章宏, 松岡葵, 宮岡大, 金水敏, 佐々木冠, 風間伸次郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 310
3. 書名 日本語の格表現	

1. 著者名 田窪行則, 野田尚史, 小磯花絵, 中俣尚己, 木部暢子, 小木曾智信, 迫田久美子, 佐々木藍子, 細井陽子, 須賀和香子, 松吉俊, 浅原正幸, 窪園晴夫, 有田節子, 益岡隆志, 原由理枝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 228
3. 書名 データに基づく日本語のモダリティ研究	

1. 著者名 杉村孝夫, 木部暢子, 江口泰生, 二階堂整, 前田桂子, 荻野千砂子, 佐藤久美子, 原田走一郎, 門屋飛央, 東寺祐亮, 堀畑正臣, 岡島昭浩, 塚本泰造, 森脇茂秀, 勝又隆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創想社	5. 総ページ数 318
3. 書名 坂口至教授退職記念日本語論集	

1. 著者名 田附敏尚, 大橋純一, 櫻井真美, 吉田雅昭, 竹田晃子, 甲田直美, 川崎めぐみ, 作田将三郎, 中西太郎, 小林隆, 澤村美幸, 椎名渉子, 太田有紀, 佐藤亜実, 櫛引祐希子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 864
3. 書名 生活を伝える方言会話 [資料編・分析編]	

1. 著者名 小林隆, 浜野祥子, 定延利之, 半沢幹一, 竹田晃子, 高丸圭一, 平田佐智子, 友定賢治, 小野正弘, 川崎めぐみ, 田附敏尚, 小西いずみ, 有元光彦, 船木礼子, 深津周太	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 感性の方言学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新田 哲夫 (Nitta Tetsuo) (90172725)	金沢大学・歴史言語文化学系・教授 (13301)	
研究分担者	日高 水穂 (Hidaka Mizuho) (80292358)	関西大学・文学部・教授 (34416)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	五十嵐 陽介 (Igarashi Yosuke) (00549008)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・教授 (62618)	
研究分担者	三井 はるみ (Mitsui Harumi) (50219672)	國學院大學・文学部・教授 (32614)	
研究分担者	椎名 渉子 (Shiina Shoko) (70765685)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授 (23903)	
研究分担者	田附 敏尚 (Tatsuki Toshihisa) (90645813)	神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授 (34513)	
研究分担者	井上 文子 (Inoue Fumiko) (90263186)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・准教授 (62618)	
研究分担者	熊谷 康雄 (Kumagai Yasuo) (30215016)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・名誉所員 (62618)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------